

第7回ころにジーンとくる！いのちのエンジニアのはなし

「20年前の出会い ～私の人生の道となった臨床工学技士～」

埼玉医科大学病院 臨床工学部

大橋 直人

20年前、私は高校生2年生でした。部活が終わり家に帰ると、急に腹部あたりが我慢できないほどの痛みに襲われ、女急車で大学病院へ行きました。医師からは「腎臓の数値が高く、数値が良くならなければ人工透析をする必要があります」と言われ、すぐに処置室で点滴が始まりました。点滴中に両親だけが看護師に呼ばれ、医師から今後の話をされていました。医師の説明を受けた後の両親は、2人共下を向き、深く落ち込んだ様子でした。点滴が終わり、私と両親が待合室で待っていると、白衣を着た男性が人工透析のハンドブックを手に持った両親に「何か不安なことがあれば、聞いて下さい」と優しく声を掛けてくれたのを覚えています。

数日後、腎臓の数値は改善し、医師からも人工透析の話はなくなりました。

そして私は高校3年生になり、今後の進路について両親に1年前入院した経験から「医療従事者になりたい」と相談すると「それなら臨床工学技士になりなさい」と言われました。私はその会話の中で、1年前に急性腎不全になっていて、一生人工透析が必要となる可能性があったことを詳しく説明されました。当時、両親が本当に感謝していたのが、答えづらい質問に対して親身に話を聞き、一つ一つ丁寧に答えてくれた白衣を着た男性（臨床工学技士）の存在でした。その男性は腎代替療法の選択肢だけでなく、その治療のメリット・デメリット、更に治療に使用する医療機器までわかりやすく話してくれました。その話を聞いてから、いつか私も患者に親身になって寄り添える臨床工学技士になりたいと思うようになり、将来の夢が臨床工学技士になりました。

現在、私は20年前にお世話になった大学病院で臨床工学技士として働いています。20年前、落ち込んでいた両親に寄り添い、私の人生の道となったあの時の臨床工学士になれるよう今後も初心を忘れず日々精進していきたいと思います。